

最優秀賞(京都府知事賞)

北方領土という故郷

京都府立園部高等学校附属中学校
三年 十倉 希望

私に北方領土への興味を抱かせたのは、国後島を写した一枚の写真だった。緑や黄色のカラフルな屋根、舗装された道路、教会の尖塔、かつて日本人が生活を営んでいた故郷。それはたくさんの思い出が詰まった温かい場所、いつまでも居たい心が休まる場所だ。しかし、今その面影はほとんどなく、ロシアの町と化していった。ロシアに占領されて自由に土を踏み踏むこともできない上、島に戻れたとしても記憶の中で懐かしむしかないなんて……何としても北方領土を返してやりたい。そんな気持ちだが、私の中に芽生えた。しかし、ロシア化が進んでいるということは、ロシア人島民にとってもなじみ深い場所となりつつあるという事だ。だから、北方領土をどちらか一方のものとして争っていても、本当の解決にはつながらない。ではどうすれば良いのか。私は様々な人の声を調べ、考えてみることにした。

まず調べたのは、日本人元島民の声。やはり「故郷を離れるのは辛かった。」「二日も早く故郷へ帰りたい。」「という思いが多いようだったが、意外なことにロシア人を憎く感じているというような内容のものはあまりなかった。また、ソ連軍が北方領土へ侵入してから数年間、日本人とソ連人が共に協力して暮らしていたことも分かった。その中で日本人元島民のある方は、ソ連兵に対して「いい人たちだなあ。」という思いを抱き、一方でソ連人からは「仲良くしたい。」と言われたこともあったそうだ。

次に、ロシアの人々の声。平成二二年に外務省が行った調査では、北方領土は現在も今後もロシアに帰属

するという考えが五三%、日本に帰属すべきという考えが三%、両国が互いに合意すべきだという考えが三二%だった。自国の国民が住む場所を自国の領土かと思われたらYESと答えるのが自然だと思うから、ロシアの領土だとする考えが最も多いのには納得したが、それとは違う意見に三〇%以上もの人が賛成していることに驚いた。また、島の子供たちは「北方領土は自分たちの大切な故郷であり、大学進学のために島を出ても大人になったら戻ってきたい。」と考えていることも知った。

そして最後に、私たち日本国民の声。「柔軟に対応していくべきだ。」という考えが高い割合を占める一方で、北方領土問題についてあまり知らない人や興味がない人も多かった。

これらの調べから、私が考えた北方領土問題の解決策は、「共存」を前提にした返還だ。日本もロシアも共に平和的な解決を望んでいるし、過去に共同生活をしたこともある。そして何よりも、北方領土が両国の島民が帰ることのできる故郷となるために。言葉や文化、国民性など様々な違いはあるけれど、長い歴史の中で異なる文化や宗教を広く受け入れてきた日本と、人一倍親切だと言われるロシア。お互いの良さを知り、理解しようとする気持ちを持てば、共に暮らしていくという解決ができると思う。

また、私たちはもつと北方領土に関心を持たなくてはならない。北方領土問題を国と国という大きな問題としてではなく、人と人という自分にとつても身近な問題として捉えていかなければならない。その上で問題への関心を高め、考え、行動していくことが必要だ。

北方領土問題の真の解決。いつ実現するのかわからない。小さな力をどう役立てられるのかもまだ分からない。しかし、これからの国を支えていく立場になる一人として、今回の学びをしっかりと心に留め、向き合っていくように思う。

最優秀賞(京都市長賞)

北方領土問題に対する意識の高揚

京都市立嵯峨中学校
二年 児玉 宜伸

二〇一五年二月、日本は旧ソ連・ロシアによる北方四島の不法占拠から七十年目の節目を迎えた。日本は四島の返還に向けて、歴史的事実を歪めるロシアの姿勢を改めさせるとともに、即時返還を求める具体策を検討しなければならぬ。

外交の歴史を振り返ると、二〇〇〇年にプーチン大統領が登場して以来、返還交渉には目立った進展は見られない。北方領土は先の大戦の結果、正當にロシアの領土と述べるなど、ロシアは歴史を歪める強硬な姿勢を崩していない。クリミア半島の併合やウクライナへの軍事介入など、この一年のロシアの外交を見ても、相変わらずの理不尽さには驚き、失望するばかりである。

今年の八月、「北方領土青少年等現地視察支援事業」に参加する機会に恵まれ、北海道の根室を訪ね、北方領土問題の背後にある深刻な人権問題について学んだ。北方領土の元島民は、第二次世界大戦が終結した今も、その余波を受け、苦悩の日々を送られている。終戦後、旧ソ連軍の侵攻により、北方領土の多楽島から強制的に北海道の本島に移住させられた島民の体験談によると、時が経てば故郷の島に戻れるという期待を持ち続けておられるということである。しかし、現実にはすでに七十年もの年月が経過している。現に、約一万人もの元島民の方が亡くなり、望郷の念を抱く約七千人

の方の平均年齢が、八十歳に近いことを考えると、この問題は即時解決を図る必要があると認識した。現地視察の際に、納沙布岬から国後島を目にした時、元島民の方々の積年の苦しみを実感できたように思った。わずか十数キロしか離れていないところに故郷があつても、その土を踏めない無念さを思うと今も本当に心が痛む。

北方領土問題は、ロシアとの外交問題であり、確かに様々な利権と国益が関わっている。日本政府の中には、これまでのロシアとの交渉を踏まえて、歯舞群島・色丹島の返還を実現させるべきであるという議論がある。と聞いてはいる。この考え方は、四島返還を断念するかのような発言にも聞こえる。しかし、このような妥協案では、歴史を歪めるロシアの理不尽な態度に屈するのと同じである。日本国として毅然とした態度を示し、四島返還に向けた交渉を進展させてもらいたい。北方領土問題には、人権問題が深く関わっている点を忘れてはならない。また、北方領土問題の解決には、私たち一人ひとりの正しい歴史認識、そして何よりも、問題解決に向けての日本国民全体の意識の高揚が、交渉の後押しとして大切であると実感した。